審査講評　高円寺会館改築設計者選定委員会委員長
古谷　誠章（早稲田大学教授）

建築家の仕事とは、発注者が構想するまだ形の見えない希望を形にし、利用者が味わう楽しさや快適さを形にし、そしてまた、近隣をはじめとする多くの人々にとって、まだ目に見えるものとなっていないその土地に潜在する空間の可能性を、目に見える形にすることだといえます。しかも建築の専門家でない多くの市民にとって、初めからその完成後のイメージがはっきりしているとはいえません。従ってその建築家を選ぶこととは、既に目の前に形の見えている自動車や洋服を選ぶのとは違って、成果品の内容と価格を比較して買うのではなく、まだ姿の見えない計画を共に考え、輻輳する様々な問題を克服して解決案をまとめ上げる協働者を選ぶことに他なりません。つまり「これから」に期待して「買う」わけで、それに相応しい建築家として力量を持ち、かつ計画案の方向性が希望に叶うものであるか否かの総合的な判断が必要です。入札の制度を通じて、設計を「安い価格」で引き受けますというだけの人を選んだのでは、成果として質の高い建築を望むことは到底無理なのです。

新しい高円寺会館の建設に関心を持って応募してくれた７０人の建築家は、この機会にそれぞれの能力を最大限発揮してくれようとした人たちです。本来、そのすべての方々に会い、その実績を直に訪ね、また全員にアイディアを示してもらえればそれに越したことは無いのですが、時間的にも経費的にもなかなかそうはいきません。そこで、第一段階では応募者から提出された、過去の劇場や集会施設に関連する実績と、文章による本計画への取り組み姿勢をもとに全審査員が議論し、１１人に絞り込んだ上で、一歩進めたそれぞれのアイディアをまとめてもらいました。

その内容については、最終審査に先立って区役所のロビーに展示しましたが、いずれもこの計画の特性を誠実かつ熱心に検討し、各々の専門的見地からの優れた提案になっておりました。ただし、非常に厳しい敷地の制約、近隣との関係などの立地条件、また工事費の見通しなどから、屋上や屋外に開放しようという度合いの高めの提案、地下部分の比重の大きめの提案、建物全体が複雑で外観などに過度な表現のあるものなどは、高い評価を得にくかったように思います。それらの中から優れた長所をもって第３段階に選ばれたのは、いろいろな面でまさに三者三様のものでした。

斎藤義氏は劇場に関する豊富な経験と知識を有し、とくに世田谷区のシアタートラムでの、極度に制約条件の厳しい中での、創造的な演劇活動を底から支えようとする「創作型」のホールと、それを支えるバックヤード部門の見事な立体パズル的空間の解決は、今回の計画にも通じる難度の高い建築計画で、十二分に信頼を寄せられるものでした。また高円寺会館での特徴を「専門家と区民活動の共存と相乗の場」ととらえる明晰さが、各部門間を峻別する確固たる案に結実していました。しかし、各ホールの内部空間が申し分の無い内容を持つ一方で、光の井戸を垂直に貫くためにどうしても狭めになるホワイエなど、ホ

ール外の空間にしわ寄せがいった感があります。とくに敷地の通り抜けを確保するため、また地下の阿波踊りホールに開放性を得るがために、グランドレベルの共用空間が狭隘になってしまった点が惜しまれました。

多くの技術提案書に詳細すぎる表現が見られたなかで、北川原温氏の提案はプロポーザルで求められる通常の表現レベルに沿ったもので、真摯な印象を与えました。また、あらたに敷地周辺を丹念に調査した上で、今後の計画を通じて住民とも協力し合い、そこから発見されるまちの特性を計画に採り入れようとする姿勢には好感がもたれました。郡山市のビッグパレット福島の展示場で実現した気品のある大空間の構成も、非凡なデザイン力を有するものと高い評価を得ました。しかし今後短期間に実施設計をまとめるには、案の方向性に不明確な部分があり、特に区民ホール周りでの空間の流動性や屋上の活用には困難な問題の発生が危惧されました。

最優秀に選ばれた伊東豊雄氏は、提案説明の中で「周辺に対してあえて閉じる」ことを提案の主題と述べ、比較的多くの案が施設の開放を旨としていた中ではかなり独特の方針をとっています。その理由として周辺の喧噪や大気汚染をあげましたが、さらにこの施設から発生する音の近隣への影響を考える上でも、建物を無やみに開放的に扱わないとする方針には合理性があります。その上で、建築計画を平面的にも断面的にも単純化し、箱型の明快な立体構成とすることで、周囲に対し劇場の存在感をアピールしようとしています。この単純明快さが、本計画の複雑な与条件をわかりやすく解きほぐし、発注者や利用者、劇場関係者などを交えた今後おこなう集中的な協議のいわばスタートラインを明示し、また断熱、遮音等が必要な地上部分の外表面積を最小限とすることで、工事費や維持管理費の縮減、また工期の短縮にもつながるものと期待させるものでした。とくに同一平面内に配置される種々のバックアップ施設との連携や、無段差でのりこめるグランドレベルの柔軟な活用イメージは非常に魅力的なものです。一方で、専門劇場に必要とされる独立性、劇場に望まれる内部空間の高さや、縦に重なり合うホール間の遮音性能など、技術的に解決が必要ないくつかの問題が横たわっています。今後の関係者間での熱心な議論と協力に大いに期待したいと考えています。

最後に、応募されたすべての建築家にあらためて感謝の意を表します。お陰でとても水準の高い選考を行うことが出来ました。また、本事業にかかる設計者選定を資質評価型プロポーザルとして企画していただいた杉並区長、ならびにすべての関係者に建築家と審査委員会を代表して感謝いたします。区民の期待に応えられるよい建築が実現することを確信しています。どうもありがとうございました。

審査講評　高円寺会館改築設計者選定委員会副委員長
村上　美奈子（杉並区都市計画審議会委員）

結果を知ると多くの人は、「また、伊東豊雄さんだったの」といった感想を述べられる。

今回の審査方法は、資質評価型プロポーザル方式ではあるが、杉並区バージョンとしての工夫も組み込まれていた。違った選考方法にすれば、新しい人材発掘、新しい設計提案といった期待があったようだ。地元は別として建築関係者の期待の表現といえる。

しかし、これまでの入札制度では決して行われてこなかった議論を踏まえた上で、選考の合理性、公平性、透明性があったし、その結論であった。

応募資格として、近年、指定された地域内での類似施設の設計経験があり、2000 ㎡以上の完成した建築物の建築設計の責任者としての実績という条件があった。応募者のレベルが高いことから、第 1 次審査で 70 人から 11 人を選考することは大変な作業であった。

「高円寺会館に対する基本的考え方」の記述は、第二次審査の提案につながっていることから、後に確認したことであるが、抽象的な精神論よりも具体性の伴う提案が選ばれており、提案に反映されていた。

敷地条件が厳しいこともあって、全体に空間が狭くなり過ぎたものが目についた。阿波踊りをどのように扱うかが、小劇場や区民ホールのあり方を性格づけるポイントであったように思う。区民参加の重要な部分ではあるが、日常の使い方はあくまでも練習室とするか、付加要素をもたせるかが、提案内容を左右していた。

斎藤 義案は、後者であり、多くの提案内容が盛り込まれていた。階の数が多く縦の動線が主流でありながら、光井戸のスペースもとっていることから、空間のきつさを生じていたと思う。

北川原 温案は、街路空間と連続した阿波踊りホールを提案し、まちづくりとのつながりが興味の持てるところであった。実際に設計に進んだ場合住民参加で造りこんでいく面白さを含んでいたが、最上階の阿波踊りホールがそうした効果を出せるか疑問もあった。

伊東 豊雄案は、小劇場を芝居小屋、芝居のための場を囲い込むということから、地上レベルに位置させ、明解な空間構成で新たな劇場のあり方を提案している。将来、鉄の小屋が高円寺の新たな界隈性を作り出すパワーとなることが予感される。

最終審査は公開であり、関心のたかかったところで、3 人の建築家の発表を中心に緊張感溢れる質疑の応答であった。新たな時代のあり方が展開された。私個人としては、設計者の資質評価をする際、4 つの審査すなわち高円寺会館の「考え方」、「提案」、「実績」、「人物」の個々の評価よりもそれらの関係性の中で、今回の設計に向かう際の姿勢を読み取ることができたことが貴重な体験であった。設計の提案は設計者のパーソナリティに裏打ちされて始めて可能性を持ってくる。設計者選定は今回のように多様な視点から審査されるべきだと思う。

審査講評　高円寺会館改築設計者選定委員会委員
佐藤　信（東京学芸大学教授）

劇場というのは「在る」ものではなくて「成る」ものである。立派な建物や設備よりも、そこでおこなわれる営みこそが、劇場の善し悪しをつくり出す。

長年、演劇づくりを中心に自分自身の仕事場として劇場にかかわってきた者の偽らざる実感である。

今回、杉並区で実施された高円寺会館改築の設計者選定ための「資質評価型プロポーザル」審査では、建築や都市計画、行政については非専門家であるわたくしが、これまで演劇、劇場にかかわりをもってきた当事者として、審査員のひとりに招いていただいた。

わたくしにとっては初めての経験である今回の「資質評価型プロポーザル」審査の過程は、応募された建築家の数、質、そして提案内容のバラエティもあって、予想を超えた充実したものとなった。

審査の議論では、わたくし自身は、演劇、劇場関係者という自分の立場と、もうひとつ、杉並区の納税者のひとりという思いを根拠にした発言と判断とをこころがけた。

その結果、建築や行政の専門家から見れば、時に極端とも思われかねない内容や論理に傾いた発言もあったかと思われるが、建築家、行政官からなる他の審査員の方々が、実に気持ちよく、また、真摯に耳を傾けて下さったことをありがたく思っている。

わたくしの観点は、これからの公共劇場の役割と内容ということにつきる。すなわち、納税者の税金によって建設（改築）、運営される公共劇場のあるべき姿についてのそれぞれの建築家の理解、および理念を、提案された具体的な形から読み取ることを第一義とした。

高名な建築家の名前も多数散見された７０におよぶ応募の内容は、難しい敷地条件や盛りだくさんな改築与件にもかかわらず、実に多岐にわたり、また建物自体のデザインという意味では魅力あるものも少なくなかった。しかし、わたくしが期待していた、いまだ概念としてかならずしも熟したものとはいえない公共劇場（あるいは劇場系公共施設）のあるべき姿という意味では、とくに突出した取り組みを感じられるものは見当たらなかった。

したがって、個人的にはあくまでも「資質評価」に力点をおいて、劇場の専門性と地域住民への貢献という、ときには二律背反をも含む課題への取り組み意欲という、やや側面的な判断基準をとらざるを得なかったことを残念に思っている。

最終的には、これからの公共劇場に必要と思われる要素を可能なかぎりすべて盛り込むことをこころがけた斎藤義さん、地域とのかかわりのためのニュートラルな姿勢を強調した北川原温さん、あえて閉じた箱としての劇場に重点をおいた伊東豊雄さんという、対照的なアプローチを見せた三作品が残り、それぞれに個性的なプレゼンテーションと質疑応答、最終審査会での白熱した議論を経て、公表されている結果に至った。

今回の「資質評価型プロポーザル」の主催、運営をおこない、審査会における自由闊達な意見交換と、可能なかぎりオープンな情報公開をこころがけて下さった杉並区と担当者

の方々には、ここにあらためて敬意を表しておきたい。

「資質評価型プロポーザル」のほんとうの成否は、今後の設計者、区、区民、そして劇場専門家をふくむ施設の実際的な運営にあたるメンバーの四者よりなる共働体制づくりと、そこから生み出される内容によってあきらかになるだろう。なによりも、真のオーナーである杉並区民のための実りのある成果をこころから期待している。

審査講評　高円寺会館改築設計者選定委員会委員
本杉 省三（日本大学教授）

劇場は、自らが発生源でありながら、他からの音・振動を極端に嫌います。それを複数持つ本計画は、敷地条件に対する要求において極めて難しい課題を突き付けています。にもかかわらず、70 もの提案が集まった理由は、それを越えて挑戦したくなるような公立文化施設の新機軸を感じさせるところにあるようです。それは、活発な演劇活動を展開する東京においてこそ初めて可能な活動です。しかし一方で、東京における芸術文化は消費的な活動になりがちで、専門家から市民（区民）までを含んだ幅広い交流を促進することに縁遠いという指摘も耳にします。それを運営・建築両面から突き破ろうとする姿勢に応募者たちが魅力を感じたものと想像できます。

第一段階の書類選考に当たっては、経験の重みによらず可能性を感じさせる提案を選ぶように心掛け、敷地環境や活動イメージを通して構想される施設・劇場に関する考えと取り組み方に注目しました。第二段階では、施設の特徴やゾーニング、各種動線と交流空間としての居場所、遮音への配慮などの提案内容を見ました。11 の提案は、いずれも苦心の跡が伺える内容で、構想の発展性を想像しながら各提案を読み解いていきました。そのことを通じて、改めて本課題の重さを再確認させられて気がします。第三段階に進んだ 3 案は、結果的に各々異なったアプローチと姿を見せてくれたものでした。それを評価することは、同時に私自身にとっても、本計画の魅力と課題を深くまで考えさせるものでした。

例えば、本施設の見え方や佇まいです。計画地が高架の線路際ということもあって、車窓からの見え方を意識し、大きな開口やメッセージ性のあるファサードを提案した案が多くを占める中で、最優秀に選ばれた伊東案は、一見逆のスタンスに立った提案のように見えながら、慎重に考え抜かれた魅力を持つものでした。本計画が目指す活動に柔軟性を持って呼応するよう、明快なプランニングによって難問をスマートに解いています。それでいて、ここが劇場であり市民文化活動の場だというエネルギーを有した提案です。遅れてきた観客への配慮など細やかさも盛り込まれています。機能面においても、多くの案が駐車用リフトと搬入リフトを兼用しているのに対して、小劇場を 1 階に配することで搬入や避難動線を効果的かつ安全に計画しています。また、共用部が狭くなりがちで居場所を得にくい他案に比べ、階数を抑え目的機能以外でも余裕のある空間を生み出しています。すなわち、劇場・ホールを 4 層に分けながらも、ホール選択利用の提案や各層に設けられた共用空間によって、活動の複合性や交流が期待できる内容になっているのが特徴です。今後の要望等に対しても、また短期間の設計スケジュールにおいても、比較的柔軟に対応できる可能性を感じさせる点も評価できるものでした。ただ、やはり縦積みされた劇場・ホールの遮音には十分な対策が望まれるところで、具体化に当たっては、その心配をないものにしていって欲しいと思います。

一方、斎藤案は中央に階段等の縦動線と吹き抜けを配置し、その南北に劇場・ホールを

立体的に分散するという計画です。プレゼンテーションは、提案書を発展させた映像まで表現するなど意気込みが感じられ、劇場計画には経験と知識が感じられました。設計者としての真摯な姿勢や幅広い分野にわたるスタッフ構成も期待感を抱かせるものでした。また、現地視察させてもらった世田谷パブリックシアターが厳しい条件下で地下空間をパズルのように解き、今日の活動を支えていることも十分認められました。しかし、提案における中央部の領域が、かえってその両側に二分された諸室を窮屈なものとしているという印象が最後まで拭えませんでした。一つを動かすと全体に関わる大きな動きが発生するような厳密性がマイナスに作用し、それが、類似施設とは同一化されない魅力を浮き彫りにしたいと考える本計画への期待を満たすには至らなかったように思われます。駐車場の扱いにも疑問が残ります。また 1 階入口部分の窮屈さを初めとして、ロビーなど共用空間に豊かさが感じられない点など優位を得るには至りませんでした。

北川原案においては、1 階部分の扱いと劇場・ホールのフレキシビリティに加え、周辺環境の読解においたプレゼンテーション時の説明が特徴として挙げられます。著名なダンスグループの舞台美術を手掛けられている経験と地域分析からの提案を目指す姿勢に可能性を感じることが出来ました。しかし、それがどのように具体化されるのか不鮮明なままでしたし、諸室の拡張性には、そこまでの必然性を認めることが出来ませんでした。むしろ、それに伴う音響上の配慮を考えると、心配が先に立ってしまいました。1 階部分のゾーニングや動線計画もまだ検討の余地があるように思えます。設計期間の短さを考えると、全体的にもう少しイメージを共有化できる提案が必要だと感じられ、前者 2 案に比べて高い評価を得るには至りませんでした。

最後になりますが、難しい条件下での課題に参加してくれた建築家の熱意と提案に心より敬意と感謝を表します。設計者を選定するプロセスは比較的長い時間が必要で、設計者はもちろん審査側にとっても決して楽なものではありません。しかし、魅力ある提案・設計者を求めるために惜しんではならない重要な過程です。杉並区にとっても大変有意義であったと思います。最終プレゼンテーション・選考前に第二段階で提出された 11 案を全て公開したことも選考の透明性を保証するものです。これを特例とするのでなく、杉並区がますます魅力あるまちとなるよう設計者選定に変わらぬ熱意をもって臨んでいただければと思います。そうした行政の熱意と区民の心意気によって本計画が具現化し、老若男女が集う場になってくれることを期待しています。

審査講評　高円寺会館改築設計者選定委員会委員
鳥山 千尋（杉並区都市整備部まちづくり担当部長）

今回の選考に応募してくださった多くの建築家の皆様に心からお礼申し上げます。
わが国の建築界の第一線でご活躍されておられる方々７０名から提案をいただいたわけですが、私ども区の職員の予想をはるかに上回る力作ばかりで、「選考」を担うのは、心踊ることであると同時にとても辛いことでもありました。

第一次審査では１１者を選ばせていただきましたが、私は、敷地の位置、形状、規模等の制約も大きいなかで、施設自体の使い勝手などに関することは当然として、この施設が新たにつくられることによって、高円寺のまちの魅力がどう高まるか、まちの人々の文化的な活動がいっそう確固としたものとなり、発展するか、といった点をとくに重視しました。
この点で、JR 中央線の高架、環七通り、高円寺駅などとの関係についての様々な提案をいただきましたが、一次審査では、たとえば施設の１階まわりを前面道路にどう開くかについても、ひとつのタイプに絞ることは避けたいと考えました。

第二次審査ではさらに３者を選ばせていただきました。
第一次審査を通過した１１者の方々の提案のほとんどがかなり詳しい平・立・断面とともに魅力的なパースペクティブを備え、また、住民参加の方法や施設の運営のありかた、省資源・省エネなどについても、つっこんで言及されているという状況でした。
こうしたことから審査は、委員間の厳しい意見のやりとりとなったのですが、私は第一次審査での考え方をふまえ、それがどう現実化されうるのか、という観点から意見を述べさせていただきました。結果として斎藤、伊東、北川原各氏が選ばれたことについては、私も十分納得しています。

第三次審査は、斎藤、伊東、北川原各氏の設計による施設を現地に赴いて見学し、運営担当者へヒアリングを行い、日を改めて３者による公開プレゼンテーションと質疑をふまえ実施しました。
この施設見学・ヒアリングをつうじ、それぞれの施設の目的、立地、規模、内容、運営方法などは異なりますが、いずれも魅力的な設計で、運営者サイドにも好意的に受け入れられているという印象をもちました。また、施設のつくられる過程での、多様で複雑な要望をご苦労されながらとりまとめられた「調整力」については、３者に共通したものを感じ、心強く思いました。

公開プレゼンテーションと私たち選考委員との質疑では、新たな施設づくりについての

３者それぞれの意図がさらに明らかとなりましたが、同時に、３者のこのプロジェクトへの対応の誠実さはもとより、建築家としての人間的な魅力までもを強く感じとることができました。
　結果的には、伊東豊雄氏が選ばれましたが、最終審査は激論となりました。
　最大の論点は、小劇場の備えるべき機能をめぐるもので、斎藤、伊東両氏のこの点での提案をどう評価するかでした。

　伊東氏の、シンプルな箱の中に箱を積み重ねる大胆な構成、劇場空間としての柔軟性などを私は高く評価しましたが、奈落が計画されていないこと、可動の間仕切りなど、伊東氏の提案はスタンダードな小劇場づくりとはいえないのではないか、との他委員からの指摘もあり、評価が二分しました。
　この点では、地上階に小劇場を配置することで施設全体の機能が高められていること、奈落については今後の設計作業のなかでさらに検討が可能である、などの意見も出され、私も納得しました。
　私はまた、伊東氏の主張・・・施設が環七通りから至近にあること等から、施設の足元は、人々が集うような敷地内のオープンスペースとして積極的に位置づけるには無理があるのではないか・・・という主張に説得力を感じました。

　斎藤氏のシアター・トラム（世田谷区）における非常に厳しい場所的制約のなかでの魅力溢れる劇場空間の実現と、それを支えるきめ細かな工夫、そして、今回のプロジェクトにおける施設を周囲へ開く方法などには大いに惹かれるものがありました。
　斎藤氏の提案では、中央の吹き抜けを軸に多様な機能が盛り込まれ、すぐ、実施設計に移ることが可能とさえ思ったほどでしたが、同時に、各ホールのロビーをはじめ、全体的にみてとても窮屈な施設になっているのではないか、という印象を受けました。また、カスケードなど足元の階段状のしつらえについても、現実的にうまく運営できるのかどうか懸念を感じました。

　北川原氏の１階のピロティを挟んで、宙に浮いた区民ホール・阿波踊りホールなどを、地下には小劇場を、との構成も魅力的でしたが、私は、もう少し明快な施設のイメージ、あるいは、キラリと光る目玉といったものがほしいと感じました。また、１階のピロティは、施設の立地などからいって、実際の施設運営のなかで提案の意図が生かせるのかどうか、心配な面がありました。
　選考委員会全体の雰囲気からいうと、北川原氏の今回の提案は、規模の大きい施設であれば、ずっと高い評価が得られたのではないかと思われます。
　しかしながら、北川原氏の率直で誠実な語り口が好感をもって来場者に受け止められ、今回のプレゼンテーション・質疑を充実したものとし、また、会場の雰囲気を盛り上げた

ことはまぎれもない事実です。

以上のように、今回の審査では、最優秀に伊東豊雄氏、優秀に斎藤義氏、佳作に北川原温氏を選定させていただきました。まったく畏れ多いことです。

資質評価型プロポーザルによる設計者の選定としては、ほとんどの参加者が「設計」といってよいほどの図面を作成し、ディテールの一部についても具体的な提案を行うなど、私たちが当初意図したものを超えた面もあり、何人かの提案への評価にハンディキャップが生じたかもしれません（こうしたことについては、今後区としても JIA など専門家団体や関係機関と相談しながらより好ましい途を探る必要があるかもしれません）。

またそれゆえに、今回の設計者選定の過程と今後実際に区民をはじめ多くの関係者の参画により設計を進めるこの施設の「できがたち」とが、透明度の高い緊張関係をもつものでなければ、と考えています。

全体として、今回の設計者選考は、応募者の皆様はじめ、委員各位、関係者のご尽力のおかげで中身の濃い、妥当なものであったということができます。

私としても今後は、この施設の建設・運営を魅力ある高円寺づくりの重要なポイントとして受け止め、職員とともに、果たすべき役割をまっとうしていきたいと考えています。

審査講評　高円寺会館改築設計者選定委員会委員
四居　誠（杉並区区民生活部長）

狭い敷地に、性格の異なる 3 つの小ホールを組み込むという難問ゆえに、解はそう多くはないだろうと高をくくっていたのだが、70 の提案がそれぞれ個性豊かに競い合っているのには驚いた。建築が総合芸術だとは良く聞く言葉だが、なるほど、建築家一人ひとりに異なるアプローチがあり、主張があり、表現技法があり、深遠な世界をのぞき見させていただいた気がする。ご応募いただいた 70 人の建築士の皆さんが当代一流の方々ばかりだったからでもあるのだろうが、建築門外漢の私は圧倒され、ため息をつき、そして猛烈に建築というものの魅力に惹かれた審査経過だった。

それゆえに、と言うと言い訳めくが、一次審査から三次審査に至る審査を通じて、私の評価基準に揺らぎがなかったとは言えない。もちろん、審査委員会で確認された審査基準の枠内でのことではあるのだが、一次審査では伝わってくる熱意と、それを反映した主張の明確さに力点を置き、二次審査ではいくつかの提案パターンに分類して、その中でおさまりが最も良いと感じられるものを探った。そして三次審査では、発注者である区の所管部長として、求めている機能や周辺環境との調和、維持管理経費なども含めたコストなどに注目した。

もとより合議の世界だから、選考結果と私個人の評価とは一概に一致しない。それでも、建築、都市計画、舞台芸術などの専門家がそれぞれの立場から審査し、議論をたたかわせての結果であるだけに、選考過程の透明性を高めた努力ともあいまって、多くの方々に納得いただける結果が出せたものと思う。

杉並区としては初めて実施した「資質評価型プロポーザル」だが、いくつかの課題も明らかになった。最も大きなものは、資質の評価を通じて設計士を選定する、とは言いながら、多くの応募者が熱意のあまりか、かなり詳細な、煮詰めたプランを提案され、良かれ悪しかれそのプランに審査が引きずられざるを得なかった、ということである。ただし、詳細なプランを提示したほうが有利だったかというと、難しい。実際には、プランが詳細であるだけに問題点も見えて来やすい、といったこともあったかも知れない。

もう一つは、類似施設の実績調査である。応募機会を広く、公平に確保するために、類似施設の概念をかなり広く取ったのだが、結果として、規模・性格や設計の与条件が大きく異なる施設間の比較を余儀なくされることとなってしまった。

さて、順調にいけば、周辺住民との意見交換なども踏まえて、今年度中に基本設計から実施設計まで進む予定である。設計者には大変酷なスケジュールだが、最優秀者となった伊東豊雄さんには、改めて区が求めている機能、予定される使われ方、区民や関係者の要望などを把握し、設計に取り組んでいただきたいと思う。応募プランに示された斬新で明確な設計思想と、まつもと市民芸術館で発揮された柔軟な対応力をもってすれば、必ず、万雷の拍手を受ける作品が産み出されるものと思う。これからは、発注者側の一人として、

伊東さんとも厳しく、しかし建設的な議論をたたかわせることになるであろうことを、そして、あの素晴らしい 70 の提案をも踏まえた作品作りにわずかでも関わりを持てることを、心から楽しみにしている。